

[研究論文]

小学校体育科授業実践の質的な検討

—小学校3年生「プレルボール」の実践分析を通して—

A Study of Physical Education Classroom Practice in Elementary School
Through the analysis of the practice of "Prell Ball" in the third grade of elementary school

西村 厚哉*
NISHIMURA Atsuya

坂井 清隆**
SAKAI kiyotaka

福岡教育大学大学院
教育学研究科教職実践専攻
教育実践力開発コース
初等教科教育高度実践力プログラム*

福岡教育大学
教職実践研究ユニット**

(2023年1月31日受理)

本研究は、生涯スポーツ時代の到来を見据えた小学校体育科授業の実践に対して質的な検討を試みるものである。具体的には、小学校学習指導要領（平成29年告示）体育編が示した「生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てる」授業を構想するとともに、実践を行い、その対して質的な検討を通して、実際に子どもたちに育成された資質・能力の一端を明示するものである。

この本実践によって、豊かなスポーツライフの基礎を養う観点から、実践の質的分析を行ったことにより、スポーツに対してする（試行錯誤、挑戦など）・見る（楽しむ、応援する）・支える（工夫する、共に悩むなど）視点を獲得しているとともに、運動技能向上を目指しつつも、自分なりにどうしたらスポーツを楽しめるか、スポーツを通して他者とどのように関わるかについて、模索していく姿を明示することができた。

キーワード 生涯スポーツ する・見る・支える（多様な関わり） 小学校体育科実践 質的研究

1. はじめに（研究の目的）

厚生労働省は、令和元年に、成長戦略フォローアップの一環として、「人生100年時代を見据えた健康づくり、疾病・介護予防の推進」を掲げている¹⁾。その中の **Keyword** は「健康づくり」「健康寿命」である。心身ともに健康であることは、国民一人ひとりが幸せな人生を送るための基盤であるとともに、健康上のトラブルによって、日常生活が制限されずに暮らせる期間、自立した生活を送れる期間が長ければ長いほど、その幸せを享受することができる。一方、国レ

ベルに目を移せば近年増大の一途をたどる社会保障費を抑止することにもつながるものである。

小学校学習指導要領（平成29年告示）において、体育科教育では、目標として「生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てる」ことが明記された²⁾。これまでの「運動に親しむ資質や能力の基礎を育てる」ことが体育科の目標であったことに対して、「生涯にわたって」という言葉が付加されたことは、未来志向の資質・能力の育成、コンピテンシーベースへの基調転換を示していることを意味している。いわば「生涯の豊かなスポーツライフ」の基礎として小学校体育科の位置づけが明確になり、授業

においても、単に運動技能向上だけでなく、未来志向の資質・能力育成が求められるようになったのである。

日々の生活における適度な運動は、健康増進はもちろん、生きがいや生活の質の向上につながることは言うまでもない。また、運動は、疾病を予防し、活動的な生活を送る基礎となる体力を増加させるための基本的な身体活動であるとともに、爽快感や楽しさを伴うものであり、積極的な行動として勧められている³⁾。このように、運動そのものがもつ意味も、近年大きく変わりつつある。また、スポーツ庁は、多様なスポーツライフを通じて日常的にスポーツに楽しんだり、スポーツを支え、スポーツを育てたりする活動に参画する機会の確保を目指して⁴⁾おり、その結果として、スポーツ参画人口の拡大の実現を狙っている。

学校教育における体育科もこのような社会的背景に無関心ではいけないであろう。生涯のスポーツライフを方向づける（もしくは決定づける）大事な時期の小学校体育科において、子どもたち自身が運動に対する多様な関わり方を模索し、それに基づいて実践を構想することは重要な意味をもつものであると考える。

本研究は、生涯スポーツ時代の到来を見据えた小学校の体育科授業実践に対して質的検討を試みることを目的とする。具体的には、学習指導要領体育編が示した「生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てる」授業を構想し実践を行う。その実践を対象に質的な検討を行うことを通して、実際に育成された資質・能力の一端を明示するものである。

2. 体育科授業実践の動向

友添（2015）の研究では、これまでの体育科教育では、「子どもの体力低下」を重要な課題として、数多くの実践が積み重ねられており、

具体的には、「体づくり運動」が小学校1年から導入され、中・高ともに最低必修時間が示され、小中高を通じて体力の向上を目指す実践が増えていることを明らかにしている⁵⁾。また、このような取り組みにおいて、子どもの体力向上については一定の成果は上げられているが、その一方、子ども自身が自らの力で学習を組み立てたり、より一層体育への学びを広げたり発展させたりする応用的・実践的能力の育成が課題であることを指摘している⁶⁾。

これまでの体育科授業実践研究に関して、体育の授業において多様な関わり方を模索したものについては、以下のような先行研究がある。

例えば、白須（2019）は、中学校3年生「体育理論『文化としてのスポーツ』（全3時間）」の実践において、4つの観点「する・みる・支える・知る」と、体育科授業における生徒の発言をつなげ、それを可視化することによってスポーツへの多様な関わり方の意識付けを行うことができたことを報告している⁷⁾。

坂本（2019）は、学習指導要領の記述を分析し、スポーツを「する」だけでなく、「みる」ことをはじめとした多様なスポーツへの関わり方を重視しているにもかかわらず、そこで示される具体的な提示については「するスポーツ」に傾重しているという課題を指摘している。また、生涯スポーツを志向する学校体育であるからこそ「文化」としてのスポーツという視座が必要であり、「する」ことだけに終始するのではなく、多様なスポーツの「みかた」を享受できるような授業構成や指導が重要であることを報告している⁸⁾。

仲座辰子（2018）は、高等学校1年生バレーボールの授業においてICT機器や、Office365、動画アプリを活用して「する・みる・支える・知る」の多様な関わり方を促す指導の工夫を行っている。仲座は、メタ認知活動とセルフラーニング、学習動機の一因性などを授業実践の理論的基盤

とし、I C T機器や、Office365、動画アプリを活用した授業を実施している。その際に学習すること自体が楽しいと思える「充実志向」を高め、「自ら学ぶ力」の育成や、気軽に運動に親しむきっかけとなる「する・みる・支える・知る」の多様な関わりを促すことができたかについて事前事後アンケート調査や生徒の Office365 (Forms) 振り返りシートの分析を行った。その結果、体育実技にI C Tを活用したことで、「する・みる・支える・知る」の運動への多様な関わり方に対して複数項目に関心を持った生徒が増えたこと、Office365 の OneDrive で予習復習や練習メニュー選択視聴のために練習動画を共有し、授業外で Forms を活用したことで自主的に活動を促すことができたこと、動画編集アプリでスロー再生や静止画を活用したメタ認知活動を行い、客観的な振り返り学習を行うことで運動が「楽しい」と感じる充実志向が高まったことを報告している⁹⁾。

松村(2018)は、小学校第5学年体育科「バスケットボール」で、「知る・する・みる・支える」の4つの活動を位置付けた単元構成をし、実践を行っている。特に、各段階におけるねらいに応じたゲームの設定を行い、課題の発見、課題解決の確認と修正、練習の成果の発揮のそれぞれの場面で設定し、個人の技能やチームの戦術を段階的に高めていくことができるようにしている。また、相手の動きを瞬時に分析したり、自分たちの動きを効率よく振り返ったりして話し合い活動に活かすための作戦ボードやチームノートの活用や自己やチームの中核となる技能について成功の記録を随時記入できるようにしたスキルアップカードの活用を行っている。その結果、自他の動きを客観的に分析する必要性に気付いたり、進んで仲間の動きのよさや改善点を見つけて修正しようとしたりするなど協調性の高まりがあったことを報告している。また、「支える活動」を設定し、リーグ戦の企

画・運営を自主的に行わせたことで、みんなが楽しんでゲームを行うための工夫をしたり、得点係や審判などの各自の役割を積極的に取り組んだりして、互いに支え合おうとする態度が身についたことを明らかにしている¹⁰⁾。

以上のように、小中高、それぞれの実践において、これからの生涯スポーツ時代を見据えた場合「する・みる・支える・知る」視点からの多様な関わり方を組み込んだ授業づくり(単元構成)、授業実践が必要とされており、そのような授業実践が、児童生徒の運動がもつ価値を捉え直し、楽しさや喜びを味わうとともに、仲間と関わりながら運動に取り組む態度が育成されていることは先行研究でも明らかになってきている。

しかしながら、「する・みる・支える・知る」視点からの多様な関わり方を組み込んだ授業づくりに関する先行研究は、特に、アンケート調査やノート・ワークシート等の記述、実践の観察によるものが多く、「する・みる・支える」視点による単元構成において子どもが実際にどのように「動いた」か、何を「発言した」かについて授業における精緻な記録に基づきながら固有名詞をもった子どもの言動を詳細に分析した研究はほとんど行われていない。

学習指導要領体育編で「運動やスポーツとの多様な関わり方を重視する観点から、体力や技能の程度、年齢や性別及び障害の有無等にかかわらず、運動やスポーツの多様な楽しみ方を共有することができるよう指導内容の充実を図ること。その際、共生の視点を重視して改善を図ること」(p8)¹¹⁾と述べられているように、これからの授業改善の最も重要な視点は「する・みる・支える」に関するものである。さらに言えば、単に「する・みる・支える」の視点によって構成された単元構成及び授業実践の紹介にとどまらず、「何を理解しているか、何ができるか(生きて働く「知識・技能」の習得)」、

「理解していること・できることをどう使うか（未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成）」、「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養）」（p3）¹²⁾の（いわゆる育成すべき資質能力の三本柱）育成が求められている。それにも関わらず、授業づくりや児童生徒のアンケート調査はあっても、実際の授業における児童生徒の言動に特化して、運動への多様な関わり方を通して具体的にどのような意識が育っているのか、もしくは、児童生徒がもつ運動に関する困難性などについて詳細な分析はあまり行われていないのである。

また、上述したように授業実践（特に「する」）に関する研究は多く行われているが、「支える・みる」についての実践研究は少なく、実践上の研究の余地も残されていると言える。

生涯にわたって運動やスポーツに親しみ、スポーツとの多様な関わり方を場面に応じて選択し、実践することができる体育科授業が必要とされる現在、特に「支える・見る」に関して、どのような単元構成が可能か、その単元を通してどのような意識が児童に育っているのかを明らかにすることは、大きな意義があると考えられる。

3. 研究の方法

(1) 質的研究

日本において質的研究は、1980年代になって、それまでの統計的な手法や心理学に基づいたテスト・測定に代表される実証主義的な調査に対する批判として関心が高まってきた（関口 2013）¹³⁾。特に授業研究における量的研究への批判は、授業という現象に対して、その外側にいる研究者の見解に頼りすぎており、教師や児童生徒といった授業の「内側」からの視点が損なわれて

いるといったものである。このように質的研究に関する議論においては、量的分析を批判的に捉えることにより質的研究の長所を示すことになるが、これは量的研究に問題があるのではない。むしろ、質的研究にも多くの批判（問題点）はあり、この両者は相互補完的な関係にあることは、様々な論者が指摘している¹⁴⁾。

固有性・一過性・再現不可能性という特徴をもつ授業という営みは、教師や子どもの関係性を基盤としながら、人的物的環境、教材など様々な要素が複雑に絡み合って成り立っている。その授業を研究の対象として設定することは、単に量だけでは捉えられない、子ども個人そして、教師と子ども、子どもと子どもの揺れ動く関係性を精緻に捉えることが必要になってくるのである。

遡れば、日本において、質的研究の先駆的な研究方法として「授業分析」が挙げられる。授業分析は、重松（1961）が開発した授業研究の方法¹⁵⁾であり、質的な授業研究（反省的实践の授業研究）に位置付けられ、授業の可能性や学習者の言動の関係性、教師の指導の特徴などを精緻に捉える方法である。重松の授業分析は、授業の逐語記録である「授業記録」に基づいて、授業の内側から、授業の展開過程や学習者の思考過程を説明しようとするものである。

本研究では、この授業分析を研究方法として用いることで、「する・みる・支える」視点で構成された単元展開において表出された子どもの実際の動きや発言に対して、授業での精緻な記録に基づきながら解釈し、実践で芽生えつつある資質・能力の具体を示していきたい。

(2) 体育科教育研究における授業分析の意義

体育科で重視すべき資質・能力は、①心と体を一体としてとらえること②生涯にわたって健康を保持増進すること③豊かなスポーツライフを実現することである。これらは、体育科が、教育の根本である知・徳・体の「体」を「唯一

担う教科」として各教科の基本となるとともに、実生活で心と身体の健康を増進させ、生涯にわたってスポーツを楽しむ力を育成する重要なものである。

よって、①～③の資質・能力が、子どもにどのように育成されているかを見取るためには、体育科の授業そのものを質的に解明していくことが必要である。このことは学習指導要領で求められている「どのように学んだか」といった学習評価の改善・充実を図ることと合致するものである。

また、体育科の目標では、体育や保健の見方・考え方を働かせ、課題を見付け、その解決に向けた学習過程を通して、心と体を一体として捉え、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育成することをめざすものである。そして、人間としての成長を確かなものにする「自己の学び」の必要性を明確に示している。したがって、授業分析を行うことは、学ぶ立場にある子ども達の学習実態を的確に把握するとともに、「子どもの学び」を多面的に解釈することつながり、その結果、教師の授業改善を促進させていくことになる考える。

4. 実践の概要

- (1) 実践の対象：X県Z小学校3年生
- (2) 実践日：2022年6月15日 本時：3/7時
- (3) 単元名：プレルボール
- (4) 対象学級の実態

対象学級の児童に、運動へのかかわり方について調査したところ、日常生活の中で最も深いかかわり方をしていると答えたのは、運動を「する」であった。一方、運動を「する」以外の「見る」「支える」については、ほとんど意識が向いていないことが分かった。ただ、少数ではあるが、普段の体育・スポーツにおいて「見

る」「支える」の意識をもちながら運動を行っていたり、スポーツに関わったりしていると答えた児童もいた。この児童に対してさらに詳細なインタビューを行ったところ、「見る」視点については、「友達の運動を見る」「テレビでスポーツの試合を見る」等の内容であった。「支える」視点については、「体育の用具を片付ける」「友達が怪我をしたときに助ける」等であった。少数ではあるが、単に自分が運動を「する」だけではなく、意識的に友達の運動の様子を「見る」ことを行い、準備やアドバイス、応援など具体的に「支える」ことが行っている児童がいることは、本実践を展開していく上では学習のモデルとなりうることがわかった。

(5) 単元のねらいと展開について

プレルボールは、主に小学校中学年において行われる単元で、ネット型で球技に分類される。実践のねらいは、生涯にわたってスポーツに親しみ、心身ともに健康な体づくりの実現に向けて、運動を「する」だけではなく、「見る」「支える」といった様々なかかわり方があることに気づかせるとともに、自分に適したスポーツへのかかわり方があることを実感させることである。そのために、単元の学習プロセスを通して、スポーツ（プレルボール）への関心を高めつつ、他者とともに多様な関わり方を模索させていくようにする。

そのために、練習—試合（する・審判・応援）—練習—試合（する・審判・応援）を交互に構成し、意図的に「する」「見る」「支える」場を設定するようにした。その際、特に「見る」「支える」の具体として「アドバイス・応援」を自分が「する」以外の活動として促す。

(6) 実践者の願い

実践者は、運動をすることが苦手で、体育の学習に参加することが嫌いな児童に対して、体育の学習の中で活躍できる場面があることを気づいて欲しいと願っている。また、単元を通し

て、運動を「見る」視点から「自身のできるようになった動き」「友達の動きを真似する」「仲間と楽しみながら応援する」等に気づかせ、意識して自他の動きや「見る」ことや、仲間と運動を楽しむことを味わわせたい。さらに「支える」視点では、「周囲に前向きな声かけをする」「友達にアドバイスをする」「友達を応援する」などを通して、運動しやすい環境を整えたり、自他の技能を発揮できるような雰囲気をつくったりするなどの役立ち感を味わわせたい。以上の視点に気づかせていく中で、「見る」「支える」は運動を行う上で、有効な手立てであることについて感じさせたい。

本研究における倫理上の配慮としては、児童名をアルファベット文字として使用し、仮名として個人を特定できないようにしている。

(7) 抽出児について

児童Hは、運動技能が高く普段の授業から発言も多く前向きに与えられた学習には取り組むことができる。また、場面によっては仲間に対してアドバイスをすることもできる。その一方で、友達のミスに対して叱責してしまったり、授業のルールを守ったりすることができない場面も目立つ。また、友達の発言やアドバイスを受け止めることができず、揉めてしまう場面も見られる。そのため、実践後はこれまでよりも仲間の動きに興味を示し、自身が運動をしていないときにもできるかわり方があることについて気づかせたい。

児童Kは、どの単位においても技能面が高く、性格は明るい。また、授業における発言も比較的多い児童である。しかしながら、運動を自分がしていないとき、つまり本人が「する」以外は、運動とは関係ないことを友達に話しかけたり、友達にちょっかいをかけてしまったりして運動に関わる友達の動きについては無関心であることが多い。

(8) 実践授業記録について

本授業記録は、特に(7)で示した児童HとKを中心に追ったものである。なお、児童のマスク着用や記録場所が体育館ということもあり、十分に本人たちの発言が聞き取れなかったところがある。また、抽出児の動きに関しては、文字記録者ができるだけ客観的に表現しようと努めていることを留意していただきたい。また、考察の便宜上、H児、K児以外の児童の発言はCとし、H児の記録からK児の記録にわたって通し番号にしている。同じく教師Tの発言も通し番号にしている。

5. 実践の考察

考察の対象とした授業（全7時間の3時間目）の記録については、巻末資料ⅠⅡに掲載しているので参照されたい。

〈児童Hの考察〉

児童Hは、T1「運動を自分がしていないときはどうしたらよいかな」の発問に対して対応したC1C2の二名の発言にうなずいている（H4H5）。その後、準備運動で、H9で白3の児童に「バウンドが近い」というアドバイスを送ったり、練習1は、H11相手にとりやすい位置にパスを出したり、H12ワンバウンドでとって、ワンバウンドで白3の胸のあたりに返したりしている。この導入時の教師の投げかけにより、児童Hは、この時間の「見る」「支える」に関する構えをもちつつ、準備運動や練習において、同じチームの友達へ具体的なアドバイスを送ったり、自身が手本を示すような動きを行ったりしていることがうかがえる。また、練習の際には、H17で白4が外したのを見て、拍手をしながら「惜しい」と発言したり、H20で、白5のアタックに対して、「惜しい」「惜しい」と発言したりしている。H21では、発言が聞き取れなかったが、身振り、手振りで白4に対して、動きを伝えている。このように、児童Hは、練習の列の後方ながらも身を乗り

出して同じチームの白4や白5の児童に対して、励ましの言葉を投げかけたり、具体的なアドバイスを送ったりしている。

一方、自身の「する」に関しては、T4「アタックを打つときに難しかったポイントはどんなところでしたか」の問いかけに対して、H19で「強さが難しいです」と発言したり、H23では、打つ練習をシャドーで行ったりしている。アタックで的を狙う際のボールを打つ力加減の難しさを実感しつつ、自身の「する」を試行錯誤しようとしていることがうかがえる。

展開2のゲーム形式においては、H30「もうちょっと後ろ」と白5への指示をしたり、チームの友達に対して「自分たちのコートではワンバウンドで」「とれるよ」やH34味方のパスに対して「ナイス」と発言したりしている。H35では、拍手をしながら、チームの得点を確認したり、H31では、試合中にアタックの動作をしながら友達にアドバイスをしたりしている。このように、児童Hは、試合中でありながらも、自分がプレイ「する」ことにとどまらず、チーム全体の動きに目を配りなら、絶えず友達への励ましやアドバイスを行っていることがわかった。

最後に、全体で本時の振り返りの場では、17「見る・支える活動をして難しかったこととか感想はあるかな」という問に対して、児童Hは、45「取れなかったときに、『もう1回』とか『ドンマイ』とか言われてうれしかった」と発言している。このH児の感想から、自身も友達からの声かけによって励まされ、運動（プレルボール）への関わりに対して意識を高めていることがうかがえる。

〈児童Kの考察〉

準備運動の際、K7K8ではチームの友達に対してあまり積極的な関わりは見られないが、オレンジ1の児童の発言を受けて、K9では練習の2巡目以降は、パスを両手でとりやすい位置に出すなどの動きが見られた。

展開1のアタックの練習の際にも、準備運動のときのような動きが継続的に見られたが、T21「本番（は）ネットがあるけどバウンドさせる場所はどこ辺がいいかな」の投げかけに対して、K24で「わかった。赤いテープの辺りでバウンドをさせたらいい。」と指差しながら、バウンドをさせる場所を示している。その後、K25では、児童Kは、オレンジ4に対して両手で優しいパスを出している。このように、教師の「本番（試合）ではネットがある」「バウンドさせる場所は？」などの具体的な問いかけで、児童Kは、床面のテープの存在に気づき、より近い場所における範囲を定めてアタックを打つが有効であることに気づいている。また、他者に対してもよりアタックが打ちやすい場所にボールを出すような動きに変容している。

展開2はゲーム形式であるが、K児は1試合目には審判を自分から引き受けている。K31では審判をしながらではあるが「勝てるよー」「勝てるよー」と他チームを励ますような発言をしている。また、C26は、試合に出ているオレンジ5の児童が、ルールを理解できておらず、自分のコートでワンバウンドさせないでコートにアタックを入れてしまう。これに対してK32では、身振り手振りで、オレンジ5の児童に自分のコートでワンバウンドさせるように伝えている。さらに、K34味方がキャッチできたことについて、「ナイス」と声をかけている。2試合目では、K39でオレンジ3の児童に対して、身振り、手振りをつかって「どこでバウンドをさせるか」へのアドバイスをを行い、K40では、オレンジ3の児童の攻撃が得点になったことを、手を挙げ、飛び跳ねて喜んでいる。ただ、K41では、得点が決まったことを全身で喜びを表現したことに対してクレーム（C33他）を受けている。このように試合中の児童Kの言動は、他の児童からすると「鼻につく」ようなものであったことは事実である。他にもゲーム中に周囲に対して前向きな

言葉かけをできていない場面も見られた。具体的には、仲間のチームメイトのミスにより失点してしまった際、その仲間の失敗を責めたり、勝手にルールを解釈して自分たちに有利したりするような言動である。しかしながら、前述したように身振り手振りでアドバイスを送ったり、友達のプレイを称賛したりする言動は数多く見られた。練習中には、C18のようにKの攻撃が「よかった」と言われている。大げさに喜んだり、ちょっかいをかけたりするKではあるが、練習や試合を通して、「見る」「支える」視点を意識した発言は随所に見られる。

〈実践者自身の考察〉

まず、実践者にとって、本実践は「児童の主体性を尊重する」ことを常に意識していた。本時の練習の際に列から離れているH児がいた。その時に、注意をしようとしたが、よく見てみると、運動が苦手な児童のために、身振り手振りを使いながら、仲間にアドバイスをしていたのである。まさにH児の主体性がうかがえる場面であった。体育科学習における学習の規律も大切であるが、その子の言動が「する」「見る」「支える」視点のいずれかを基盤にしていることがあるはずである。そのために、安易な学習規律を守らせるのではなく、児童の主体性を尊重する雰囲気づくりや多様な学習機会の場所を確保することが必要だと感じた。

また、運動を「する」「見る」「支える」視点の中でも、特に運動を見たり支えたりする中で、何が見え、何を支えようとしたのかを具体的に示すことが重要であると感じた。例えば、「アタックを打つ時のポイントは何か」ではなく「打つ時の手の位置はどこか」、「審判をする時にできることは何か」ではなく「審判をするときに得点が入ったら、どうするか」などである。このような問いかけによって児童は、何を見て、何をどのように支えるのかに気づいていくと考えられる。

児童Kのように、「見る」「支える」視点が形成されつつある一方で、まだ仲間のミスに対して強く責めてしまったり、受け入れることのできなかったりする場面も見られることがあった。特に低中学年特有の勝ち負けに拘るがあまりに無意識に他者を攻めてしまうことはよくあることである。そのため、今後は自身の言葉のかけ方でも周りの児童のプレイのしやすさが異なることについても感じさせていく必要がある。

6. まとめ

本研究の目的は、生涯スポーツの実現に向けた基盤を形成するための学習過程において、その資質・能力の育成の具体を子どもたちの授業中の姿から質的に明らかにすることをねらいとするものである。そのために、本体育科実践における授業記録を詳細に取り、その記録に基づいて解釈を試みた。

本実践研究の成果について、以下の2点を挙げる。

1 点目は、授業記録の言動に基づいた質的な分析によって、児童K、Hの「する」「見る」「支える」に関わる意識や思考を明らかにすることができたことである。児童K、Hも共に、練習および試合、審判の際に、自分が「する」上での試行錯誤や挑戦、「見る」上での楽しむ、応援する、「支える」上での工夫する、励ます、共に悩む姿が捉えられた。一見すれば、これらの姿は、これまでの体育の授業実践でも見られたものかもしれない。しかしながら、本実践では、教師が本時の授業のみならず単元を通して「する」「見る」「支える」に関する投げかけや学習機会を設定している。その際に、特に「見る」こと「支える」ことを具体的な子供の言動で価値づけし、そのことが自分の技能向上につながっていくことを気づかせるようにしている。このような教師の働きかけが、これまで無自覚で

あった「見る」「支える」の自覚化を促し、運動そのものを楽しもうとする姿として明らかになったと考えられる。

2点目は、今回のボールゲームである「プレルボール」での実践が、他の単元でも転用可能であることである。今回はチームゲームにおける「する」「見る」「支える」視点の意識化であったが、器械運動やゲーム走などの個人競技における意識化も類似性をもって展開できると考えられる。なぜなら、個人競技の場合、個における成長（例えば技能の向上）が重要視されるため、「する」「見る」「支える」がさらに明確になるのである。近年 ICT 化が進み、体育においてもタブレット端末等で自他の競技の様子を録画・再生して瞬時に確認することができる。まさに、授業における競技の「一回帰性」を克服した状況の実現である。このため、「する」「見る」「支える」ための学習機会が容易に実現する可能性があるのである。

今後の実践上の課題としては、特に「見る」「支える」の視点を重視した体育科実践を積み上げていくことだと考えられる。本実践においても、やはり「する」ことに関しては、どの子も意欲的に取り組むが、「見る」「支える」に関しては、その学級やチームの人間関係を包含しつつ、表面上の関わりに留まっている場面も見られた。体育科の目標が「生涯にわたって…」とその理念を示している以上、これまでのような技能中心（する）の体育授業を、「見る」「支える」も含めて大きく転換していくことが求められるはずである。

【付記】

本論文は、1～3章を坂井が執筆し、4～5章を西村が主に執筆した。6章は、坂井と西村が協働して執筆した。研究の全体構想に関しては、主に西村が行っている。

【註】

- 1) 厚生労働省
https://www.mhlw.go.jp/www1/topics/kenko21_11/b2.html
- 2) 文部科学省 小学校学習指導要領（平成 29 年告示）体育編 東洋館出版 p.17
- 3) 厚生労働省 同上
- 4) スポーツ庁（2018）スポーツ実施率向上のための行動計画 ～「スポーツ・イン・ライフ」を目指して～。
https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/shingi/001_index/bunkabukai002/shiryo/_icsFiles/afiel_dfile/2018/05/17/1404716_03.pdf
- 5) 友添秀則（2015）「体育のこれまでとこれから—学習指導要領の改訂を前にして—」小学校体育ジャーナル No78 学研 pp.1-2
<https://gakkokyoiku.gakken.co.jp/wp-content/uploads/2018/03/sj78.pdf>
- 6) 友添秀明 同上
- 7) 白須紗衣（2019）「体育理論の授業実践における多様な関わり方『する・みる・支える』の意識付け—実生活での実践に向けて—」
<https://www.edu.yamanashi.ac.jp/wp-content/uploads/2019/12/9069dad7bc52b1f27b7c137010c417f6-2.pdf>7) 山梨大学
- 8) 坂本史生（2019）「小学校体育授業における『みるスポーツ』の重要性」東京福祉大学・大学院紀要 第 10 巻 第 1-2 合併号（Bulletin of Tokyo University and Graduate School of Social Welfare）pp.99-107
- 9) 仲座辰子（2018）「『する・みる・支える・知る』の多様な関わり方を促す指導の工夫—タブレット端末と Office365 を活用したバレーボール指導を通して—」沖縄県立総合教育センター 後期長期研修員 第 63 集 研修集録年 3 月
- 10) 松村さやか（2018）「体育の見方・考え方を働かせる子どもを育てる体育科学学習指導～『知る・する・みる・支える』の 4 つの活動を位置付けた単元構成を通して～」久留米市教育センター
[http://www.kyoikucenter.kurume.ed.jp/01kennsyu/dannkenn/H30houkokusyo/H30dannkenn%20\(9\).pdf](http://www.kyoikucenter.kurume.ed.jp/01kennsyu/dannkenn/H30houkokusyo/H30dannkenn%20(9).pdf)
- 11) 文部科学省 同上 p.8
- 12) 文部科学省 同上 p.3
- 13) 関口靖広（2013）「教育研究のための質的研究法講座」北大路書房 p.5

14) 例えば、柴田好章(2000)「逐語記録にもとづく質的な授業分析への量的手法の統合に関する研究」平成10～11年度科学研究費補助金(奨励研究(A))研究成果報告書

15) 松本 康(2012)「第2部 社会科の実践論 授業分析」日本社会科教育学会編『新版社会科教育事典』 ぎょうせい pp.262-263

巻末資料Ⅰ 授業記録

児童H

時刻	抽出する生徒の言動	教師の働きかけ
例：10分ごとにくぎる	例：抽出した生徒の特徴的な言動や動きを細かく記録する。特に①他の生徒との関わり②対象となる教材(器械運動、高跳びなど)③とまどい、葛藤④技能・技術の具体的な向上など	例：全体への指示 抽出した生徒への具体的な関わり
9時45分	○授業開始 H1 体育座りをして待っている。 H2 みんなと一緒にホワイトボードのめあてを声に出して読む。 H3 本時の学習内容を確認していく。 C1「友達を助ける」と答える。 H4 C1の発言に対して、児童Hは頷く。 C2「ボールを拾ったり、アドバイスをしたりする」 H5C2の発言に対して、児童Hは頷く。 H6 歩いて、移動する。 (準備運動の両手のパス回し) H7 友達と話しながら待つ。 H8 グループ間でパス回しを行う。 H9 狙った位置にパスを出せている。：白3の児童に「バウンドが近い」とバウンドの位置が、適切ではないことについて指摘する。 ・白3の児童が次の順番でもう一度チャレンジするが、うまくいかない。 (展開1：アタックの練習) 10H 歩いて移動する H説明をする先生の近くで座って聞く。 H11 相手にとりやすい位置にパスを出す。	○挨拶を行わせる ○めあての確認を行う。 ○本時の学習内容を確認する。 T1：「運動を自分がしていないときはどうしたらよいか」 T2：「助けるとはどういうことかな」 「今日は友達の動きをよく見て、自分にできることを考えて動くことを意識してほしい」 ○準備運動を行う場所に移動させる。 ○合図を出して、パス回しを始めさせる。 ○全体を見て回る。
9時50分	H12 1バウンドでとって、1バウンドで胸のあたりに返す。 H13 順番が終わったら、列の後ろで静かに待ち、「見てアドバイスをします」と発言する。 C3：「うまくなるために」 C4：「違うよ、うまくさせるためだよ」 ・白グループは練習を再開する。	○アタックの練習をさせるため、説明を体育館後方で行うため、全員を集める。 ○練習をするように指示を出す。 ○他のグループに机間指導を行う。 T3：「赤いテープの人はどうしないといけないかな」「アドバイスをすることによって、自分もポイントが整理できるし、友達を上手にすることもできます」 ○全体を見て回る。
9時55分	H14 児童Hは、指でチームメイトに練習をする場所の指示を行う。 H15 壁に向かって、アタックをするが、的には当たらない。 H16 ボールを拾い、白6に渡す。 H17 再び順番が来て挑戦するが、的の下にアタックを打つ。 H17 白3が打ったボールを拾って、パスを出す人に渡す。：白4が外したのを見て、拍手をしながら「惜しい」と言う。 H18 自分の順番が来て、大きい的に当てる。 (展開1のポイントを整理する)	
9時58分	H19「強さが難しいです」 C5「距離が近いと強さが難しい」この発言に対して H頷く。 C6「的に当てる」 C7「パスを出すときの高さ」について難しいと答える。 H20：白5が打っていたのに対して、「惜しい」、「惜しい」という。 その後、的の右側に行き、列から並ぶのを辞める。 H21 身振り、手振りですべて4に対して、動きを伝える。…(発言が聞き取れない) H22 白3が打ったものを、打ってボールを渡す。 H23 打つ練習をシャドーで行う。(3回くらい) H24 アタックを打つが的の右側にそれる。 H25 他の児童が打ったボールを走って取りに行く。 「パスとアタックのため」と答える。 C8 全体が「やったー」「はい」といったような反応を示す。	T4：「アタックを打つときに難しかったポイントはどんなところでしたか」 T5：「具体的には」 T6：「なるほど。仲間との距離によって強さを変えるところが難しいんだね。ありがとう」 T7：「では、今のポイントについて友達と教え合いながらもう一回してみしましょう」
10時2分	H26 笑顔で両手をグーにしてあげる	○笛を吹き、練習を中断させる。 T8：「何のための練習を行いましたか」 「今の練習したことを使って、試合をしていきます」

10 時 7 分	<p>(展開 2 : ゲーム形式)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・試合の準備を進める。H は、準備の際に、白 4 と白 5 と戯れる。 <p>H27 白 1 のリーダーに促され、準備に参加する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・準備ができたグループからリーダーが座って待たせる。 <p>H28 全体から遅れて座る。 H 少し落ち着かない様子で、話を聞く。</p>	<p>T9:「準備ができれば、リーダーが座らせて、前に注目」</p> <p>T10:ゼッケンの 4.5.6 の班から試合をします」</p> <p>T11:試合をしない 1.2.3 (他のチーム) の人たちは何をしたらいいかな」</p>
10 時 10 分	<p>C9「ボール拾う」</p> <p>C10「点数を数える」</p> <p>C11「アドバイスをする」</p> <p>C12「味方を励ます」等の意見が挙がる。</p> <p>H29 少し落ち着かない様子で、話を聞く。</p>	<p>T12:「試合をしよう」と全体に言う。</p> <p>○他のグループに机間指導を行う。</p>
10 時 15 分	<p>H30 試合のコートに移動する。「もうちょっと後ろ」と白 5 に指示をする。「自分たちのコートでは 1 バウンドで」「とれるよ」と味方を応援する様子で言う。</p> <p>H31 アタックの動作をしながらアドバイスをする。</p> <p>H32 コートの外に出たボールを拾いに行く。</p> <p>H33 得点を取り、「やったー」と喜ぶ</p> <p>H34 味方のパスに対して「ナイス」と言う。</p> <p>H35 拍手をしながら、得点を確認する。強めにアタックを打ち、得点。</p> <p>H36 思い切りアタックして、得点をする。</p> <p>H37 得点をして、喜ぶ (相手に見せつける感じで喜ぶ)</p>	<p>T13:「点数を教えて下さい。」「試合を入れ替わります」</p>
10 時 17 分	<p>H38 白 5 に身振り手振りでアドバイスをする。「4 対 3」と言いながら喜ぶ</p> <p>H39 飛んできたボールを追いかける。 友達にちょっかいをかける。</p> <p>H40 味方のチームに、ジェスチャーでアドバイスを行う。</p>	
10 時 19 分	<p>H41 味方が勝ち喜ぶ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ゲームの片づけを行う。 <p>H42 座って待機する。</p> <p>C13「あり」</p>	<p>T14:「ゲームの片づけをしてください」</p> <p>T15:「点数が入って喜ぶのはありますか」「点が入って喜ぶのはあります。ただし、必要以上に相手に対して喜んだり、あおるような態度をとったりするのはなしです。」</p> <p>T16:「プレルボールで、どこに守った方が、いいかな。」</p>
10 時 26 分	<p>C14「やだ」とクラスの全体から声上がる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・クラスの多数が頷く。 <p>H43 H も納得した様子で頷く。</p>	
10 時 28 分	<p>C15「1 人が前で、1 人が後ろ、1 人がサイド」</p> <p>H44 手を挙げたが、指名はされない。</p>	<p>T17:『「支える」「みる」活動をして難しかったこととか感想はあるかな』</p>
10 時 30 分	<p>H45「取れなかったときに、もう一回とかドンマイとか言われてうれしかった」</p> <p>C16「うれしかった」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・クラスの多数が頷く。 ・立ち上がって、挨拶をする。 	<p>T18:「そういう声かけをされるとどうだった」「前向きな声かけをするとみんなもプレイしやすいので、そういう声かけを大切にしていきましょう。」</p> <p>○挨拶をさせる。</p>

巻末資料Ⅱ 授業記録

児童 K

時刻	抽出する生徒の言動	教師の働きかけ
例：10 分ごとにくぎる	例：抽出した生徒の特徴的な言動や動きを細かく記録する。特に①他の生徒との関わり②対象となる教材（器械運動、高跳びなど）③とまどい、葛藤④技能・技術の具体的な向上など	例：全体への指示 抽出した生徒への具体的な関わり
9 時 45 分	<p>○授業開始</p> <p>K1 落ち着いた様子で体育座りをして待っている。</p> <p>K2 めあての確認をし、() に入る言葉を考える。 (発言)「わかった。」と言う。</p> <p>K3 めあてを確認し、みんなと一緒にホワイトボードのめあてを声に出して読む。</p> <p>K4 本時の学習内容を確認していく。「とってあげる」と座りながら答える。</p> <p>C16「ボールを拾ったり、アドバイスをしたりする」</p>	<p>○挨拶を行わせる。</p> <p>○めあての確認を行う。</p> <p>○本時の学習内容を確認していく。</p> <p>T19:「試合の時にゲームに参加しない人はどうしたらいいかな」と全体に対して発問を行う。</p>

9 時 50 分	<p>K5 その発言に対して、児童 K は頷く。 K6 歩いて、移動する。</p> <p>(準備運動の両手のパス回し) K7 オレンジ 1 の持っているボールにちょっかいをかけてグループから注意をされるも、落ち着かない様子である。 K8 パスを出す時に、片手で投げるとともに取る相手を考えていないパスを出す。その時相手が取れないところを見て喜ぶ。 C17 「弱気で投げろって」とオレンジの 1 に注意される。 K9 2 回目以降は、パスを両手でとりやすい位置に出す。喜んでいる様子で列の後ろに並び直す。 (展開 1: アタックの練習)</p>	<p>T20: 「今日は友達の動きをよく見て、自分にできることを考えて動くことを意識してほしいです」 ○準備運動を行う場所に移動させる。 ○合図を出して、パス回しを始めさせる。</p>
9 時 55 分	<p>K10 歩いて移動する K11 説明をする先生の近くで立って聞く。 K12 黄色の 5 番にちょっかいをかける。 K13 練習をする場所に移動する。</p>	<p>○全体を見て回る。</p> <p>○アタックの練習をするようため、説明を体育館後方で行うため、全員を集める。 ○練習をするように指示を出す。 ○練習を行う場所に移動するよう指示する。 ○全体を見て回る。</p>
9 時 58 分	<p>K14 K とともに、オレンジ 1 が、カメラに向かって手を振ったり、踊ったりする。 K15 K がアタックを打つ。 C18 K のアタックに対して、他の児童が「よかった」と言う。 K16 アタックを打って、「壁に当たった」という。 C19 オレンジ 1 に当たっていないと言われる。 K17 「ここに当たったよ」とボールを持ちながら的の近くに寄る。 K18 カメラに向かって踊りながら、列に並ぶ。 K19 「いいよ」と打つなかなか打たないオレンジ 3 に対して打つように言う。 K20 うまく打てないオレンジ 3 を笑う。 C20 オレンジ 1 に「笑うな」と注意される。 K21 あまり集中していない様子で、全体のポイントの整理を行う。 C21 オレンジ 1 とオレンジ 4 に話を聞くように注意される。 K22 アタックを打つもノーバウンドになってしまっ、的に当たらない。</p>	<p>○ポイントの確認を全体で行う。</p>
	<p>K23 先生の指している方向を見ながらポイントを確認する。 K24 頷きながら聞いている。「わかった。赤いテープの辺りでバウンドをさせたらいい。」と指を差しながら、バウンドをさせる場所を説明する。 K25 パスを出す時に、オレンジ 4 に対して両手で優しいパスを出す。 (展開 1 の内容を整理する。) K26 落ち着きのない様子で、話を聞く。</p>	<p>○児童 K の横に行く。 ○児童 K に対して、床でバウンドさせてからの狙うことを確認する。 T21: 「本番ネットがあるけどバウンドさせる場所はどこら辺がいいかな」と K に対して尋ねる。</p>
10 時 2 分	<p>(練習再開する) K27 アタックを打つが、狙いの場所に打てない。 K28 自分の番ではないときもボールを触ってしまう。 C23 オレンジグループの友達から注意される。 C24 「パス」と「アタック」のため。</p>	<p>○全体に対して、ポイントを整理する。</p> <p>○練習を再開するように笛を吹く。 ○笛を吹き、練習を中断させる。</p>
10 時 7 分	<p>C25 全体が「やったー」「はい」といったような反応を示す。 K29 笑顔で両手をグーにしてあげる (展開 2: ゲーム形式) ・試合の準備を進める。 ・準備ができて座って待つ。 (1 試合目を始める) K30H は、1 試合目試合に出ないため、コートの中のボールの近くから審判をしている。 K31 コートのボールの土台に乗る。 「勝てるよー」「勝てるよー」とチームを励ます。 C26 オレンジの 5 が、ルールを理解できておらず、自分のコートでワンバウンドさせないでコートにアタックを入れてしまう。 C27 オレンジ 1 が、オレンジ 5 に対して、「コートでバウンドさせて」という。</p>	<p>T22: 「何のための練習を行いましたか」「今の練習したことを使って、試合をしていきます」 ○準備ができたところから座って待つように指示を出す。 ○1 試合目を始める合図をかける。</p>
10 時 13 分	<p>K32K も、身振り手振りを使いながら、自分のコートでワンバウンドさせるように伝える。 K33 下を通ったからこっち 1 点と点数が入ったことを伝える。</p>	<p>○全体を見て回る。</p>

10 時 17 分	<p>C28 その時の言い方が相手に対してあまり良い言い方ではなかったの で、オレンジ 1 から注意される。 K34 味方がキャッチできたことについて、「ナイス」と声をかける。 K35 得点について、6 対 5 と言う。 K36 明らかに相手の得点であったが、自分のチームの得点にする。 C29 周りから点数がおかしいと K が指摘される。 C30K がうるさいと指摘される。 (2 試合目を始める) K37 得点をして、喜ぶ。 C31 相手チームから、「その喜び方は何」と注意される。 C32 下を通ったと指摘される。「下は通っていない」と言う。 K38 自分のチームが得点して喜ぶ。 K39 オレンジ 3 に対して、身振り、手振りをつかってどこでバウンドを させるかへのアドバイスをを行う。 K40 その攻撃が得点になり、手を挙げて飛び跳ねて喜ぶ。 ・オレンジ 1 の攻撃が決まり得点になる。 K41 得点が決まったので、全身を使って喜びを表現する。 C33 相手チームからうるさいと言われ喜び方について抗議される。 K42 「喜ぶくらいいいやん」と言い返す。 ・ゲームの片づけを進んで行う。(ネットを片付ける。)</p>	<p>○隣のコートを見ている。</p> <p>○隣のコートで、審判を手伝う。</p>
10 時 19 分	<p>K43 片付けが終わり座って待つ。「こっちのチームが、11 点であっちの チームが 7 点」 C34 周りから言わないよと言われる。 K44 上履きを触りながら聞く。(発言)「あり」 C35 喜ぶのは「なし」と考える児童もいた。 ・多くの児童が頷きながら聞く。</p>	
10 時 22 分	<p>K45 体育座りをしながら話を聞く。 C36 「1 人が前で、1 人が後ろ、1 人がサイド」という意見が挙がる。 K46 下を見ていて話があまり聞けていない。 C37 「取れなかったときに、もう一回とかドンマイとか言われてうれし かった」という意見があがる。 K47 頷く C38 「うれしかった」と白 2 が言う。 ・クラスの多数が頷く。</p>	<p>○笛を吹いて試合を終わる。 ○片付けをするように指示を出す。 T22: 「点数が入り喜ぶのはあります か」「点が入って喜ぶのはあります 。ただし、必要以上に相手に対して喜ん だり、あおるような態度をとったりす るのはなしです。」 T23: 「プレルボールで、どこに守った 方が、いいかな。」 T24: 『「支える」「みる」活動をして難 しかったこととか感想はあるかな』 T25: 「そういう声かけをされるとどう だったかな」 T26: 「前向きな声かけをするとみんな もプレイしやすいので、そういう声か けを大切にしていきましょう。」 ○挨拶をさせる。</p>
10 時 28 分	<p>・立ち上がって、挨拶をする。</p>	
10 時 30 分		

